

全国歴史教育研究協議会第 57 回研究大会（埼玉大会）報告（日本史）

希望ヶ丘高校（定時制） 齋藤兆生

はじめに

「歴史的思考力をどう育成するか」というテーマで行われた今大会で、私は「生徒の主体的な学習活動を通していかに歴史的思考力を育成するか」を共通テーマとした第 2 分科会（日本史 前近代）に参加した。以下、分科会での 3 つの提案の概要と感想を述べたい。また、3 日目の史跡見学についても報告したい。

1 分科会報告

第 2 分科会での 3 つの提案は、いずれもアクティブラーニングを用いた授業の実践報告に基づいている。①「地域教材をいかして歴史的思考力を育む」では、富山県立高岡南高校の新木隆浩教諭が、富山から見える東アジアや日本列島という視点を取り入れた授業の実践報告をおこなった。日本海に面するという地理的特徴から、日本海をはさんだ対岸にあった古代国家渤海との関係について、「渤海国正使高多仏」という渤海人について資料を用いたグループ学習を行った。日本に帰化した渤海人を取り上げるというのが富山県ならではの点であり、レーダーチャートを作成して生徒の思考・判断を「見える化」するよう工夫している点も素晴らしいと思った。

②「なぜ室町時代に下剋上が起きたのか」では、埼玉県立三郷工業技術高等学校の井上肇教諭が、知識攻勢型ジグソー法により協調学習の実践報告をおこなった。資料を 3 種類作成し、違った資料を用いて各グループで考えさせ、最後に全体意見交換を行うことで、多様な考えを交流させるというものである。事前に複数の資料を準備する手間にかかるが、思考の深まりは確実で、確かな学力をつけさせるとともに、コミュニケーション能力の向上も図れるとのことだった。ある程度生徒の学力が高いことが前提で、授業進度の確保という課題もあるが、大変興味深い提案であった。

③「なぞのフランス国王にせまる～文書館職員になって解説を考えよう～」では、埼玉県立越ヶ谷高等学校の福島巖教諭が、地域教材として埼玉県立文書館の史料を生徒に読み解かせ、協働的・協調的な学習で解説を作らせる試みをおこなった授業について、実践報告をおこなった。授業で取り上げた史料は、増田家文書「仏蘭西国王図」というものである。もちろんほとんど一般には知られていないもので、郷土資料を用いることで、身近に歴史を感じ、古文書や史料を大切にすることを育成する狙いがあるとのことだった。幕末に埼玉県の春日部の名主が購入した史料ということで、幕末当時の人々がいかに国外の情報を求めているのかをうかがうことができる。また、「フランス国王」ということで、その史料に書かれている断片的なキーワードを紐解くことで、世界史での学習内容ともつながる。4 人ずつのグループ活動によって、生徒同士で協力・協働させることにより意欲が高まり、史料に対する理解が深まったとのことであった。この実践から、平素の学習においても課題解決的な学習を取り入れるよう工夫し、授業進度を確保しつつ歴史的思考力を育む授業を実施していきたいとのこと、大いに納得できる提案であった。

2 史跡見学報告～おわりに

大会 3 日目の史跡見学は、埼玉北部方面（埼玉古墳群・妻沼聖天山・日本煉瓦製造）と埼玉西部方面（川越城跡・蔵造りの町並み・鉄道博物館）の 2 コースが設定され、私は北部コースに参加した。埼玉古墳群には、「ワカタケル大王」の金石文が刻まれた鉄剣で有名な稲荷山古墳があり、以前からぜひとも訪れたいと思っていた。実際に訪れてみて、古墳の規模や古墳群全体のスケールなどがわかり、当時の支配者層の権力の大きさを感ずることができた。

今回 3 日間の全日程に参加して学んだことを、ぜひ日々の授業実践に還元していきたいと思う。